



Title	(北海道大学の歴史を学んで)愛され続ける寮歌 : 都ぞ弥生
Author(s)	倉, 千晴
Citation	北海道大学大学文書館年報, 5, 104-108
Issue Date	2010-03-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43388
Type	other
File Information	5_104-108.pdf



< 研究ノート >

[北海道大学の歴史を学んで]

愛され続ける寮歌 —— 都ぞ弥生 ——

倉 千晴

1. テーマを選んだ理由

予備校に通っていた頃、北海道大学出身の先生が、授業時間中によく「永遠の幸」を歌い聞かせてくれていたので、私にとって北大を代表する歌として思いつくのは、「永遠の幸」であった。

たいていの学校では、行事の際に校歌が歌われるのが普通であるのに対し、北海道大学では校歌以上に寮歌のほうが有名であるということが、私にとっては衝撃的なことだった。また、北海道大学応援団の方から、「都ぞ弥生」は北大生のみならず、道外の人々にも知られているということや、カラオケで歌うことができる、という話を聞き、非常に驚かされた。

そこで、「北海道大学の歴史」を受講した機会を通して、「都ぞ弥生」について調べようと考えた。

2. 調査内容

参考とした文献に書かれていた部分を要約したものをまとめていく。

I. 寮歌の誕生

1907(明治40)年、札幌農学校を東北帝国大学農科大学とする勅令が下った。この年に、寄宿舍は「恵迪寮」と命名され、最初の寮歌である「一带ゆるき」が作られた。

寮歌の作詞は、寮生により投稿されたものを寄宿舍委員会が採択するという方法で選ばれた。

1907(明治40)年以降、毎年新しい寮歌がつくられていくこととなり、1916(大正5)年には、有島武郎達によって、寮歌集が発行されるまでとなった。

1912(明治45)年、恵迪寮第6回記念祭のための寮歌の作詞を、横山芳介がすることとなった。

当時、横山は凍影社(1912年発足)という読書会に所属し、持ち前の文学の才能を発揮していた。その才能を見込まれてか、例外的に横山の寮歌の作詞の話が持ちかけられたと

されている。そして誕生した寮歌が「都ぞ弥生」である。

横山は、「都ぞ弥生」の作詞に2カ月を費やし、自らも「人の批評はどうであっても、自分はかなり努力でこの歌をつくった」とノートにつづっている。また、「都ぞ弥生」が発表されるぎりぎりの日まで、歌詞の推敲を重ねていたのだそうだ。

この横山の歌詞に曲をつけたのが、赤木顕次である。

赤木では生まれつき耳が悪いながらも、音楽の才能に恵まれていて、自ら作曲することを名乗り出た。格調高い内容の歌詞にふさわしく、かつ他の寮歌とは違う変化にとんだメロディの作曲を目指したようである。

作曲ができた際に、赤木は同僚に、「作曲が整っていないから、音楽学校に依頼して直してもらえばどうか」と言われたらしいが、一步も譲ることなく、専門家の手が加えられることはなかった。

こうして、「都ぞ弥生」は、1912（明治45）年3月26日に完成した。

Ⅱ. 曲のテンポ

「都ぞ弥生」が完成してからの2、3年は、誰もこの曲を歌うことはなかった。メロディが讚美歌のようでしめっばいという理由からである。

その後、この歌の素晴らしさが改めて見直され、多くの人々に歌われるようになった。

しかし、「都ぞ弥生」を歌う年ごとに、そのテンポや歌い方がバラバラに変化するという問題が生じていた。

ある時は、実際のテンポよりもさらに遅いスローテンポで歌われたこともあった。

これには2つの説がある。それは学徒出陣をする学友を見送った生徒が、戦争に対する怒りを鎮めるためにゆっくりと歩いて、寮から駅まで歩く間に「都ぞ弥生」を歌い終えて見送ったという説、そして柔道部の生徒が試合の結果に満足し、風呂に入りながらのんびりと「都ぞ弥生」を歌ったからという説である。

こうした問題の原因は、作曲者である赤木の楽譜が未熟であったためである。そのために毎回楽譜の改訂がなされていたらしい。後に、歌に統一性を持たせるために、当時の恵迪寮長たちが赤木の家を訪問し、曲譜を正確に書くよう依頼したそうだ。

赤木が曲譜を書き終え、北大に送ってすぐに太平洋戦争が始まってしまう、赤木自身も自分の曲譜がどのようなになったかを気にしていたらしいが、それはしっかりと恵迪寮に届けられていた。

現在の「都ぞ弥生」の楽譜は、このときの楽譜が生かされたものである。

Ⅲ. 都ぞ弥生歌碑

「都ぞ弥生」の作詞者である横山は、1912（明治45）年に東北帝国大学農科大学を卒業後、実家のある静岡の小作官となるが、46歳の若さで亡くなった。

1956（昭和31）年に、北大同窓会の集まりが、静岡の料亭“加和田”で行われた。そこ

の女将であった河田悠紀恵さんは、子守女として横山の家で働き、育てられた人であった。彼女は横山に対する感謝の思いを込めて、横山の墓の建立を呼び掛けたのである。

また同じ年に、北大創基80周年記念行事が行われたが、その場では都ぞ弥生歌碑についての話がとりあげられた。

こうして1957(昭和32)年9月24日に、北大内で都ぞ弥生歌碑の除幕式が行われた。

また1958(昭和33)年1月23日には、静岡県の大森山長源院(横山の墓のある場所)に、都ぞ弥生歌碑が建立された。

3. 調査内容から考えたこと

北大の寮歌制作は、1974(昭和49)年の「北の都は」で終わってしまうこととなるが、それまでの間にじつに百曲以上もの寮歌が誕生している。

これだけ数多くの寮歌の中で、何故「都ぞ弥生」が現在でも歌われ続けているのか、そして何故「永遠の幸」よりも馴染みがあるのかが疑問であったが、調査内容から次のようなことが考えられた。

まず「都ぞ弥生」の歌詞を見てみる。

都ぞ弥生(明治四五年寮歌) 横山芳介作詞

- 一、 都ぞ弥生の雲紫に 花の香漂う宴遊の筵
 尽きせぬ奢に濃き紅や その春暮れては移らふ色の
 夢こそ一時青き繁みに 燃えなん我胸想を載せて
 星影冴かに光れる北を 人の世の 清き国ぞとあこがれぬ
- 二、 豊かに稔れる石狩の野に 雁はるへ沈みてゆけば
 羊群声なく牧舎に帰り 手稲の嶺黄昏こめぬ
 雄々しく聳ゆる楡の梢 打振る野分に破壊の葉音の
 さやめく藁に久遠の光 おごそかに 北極星を仰ぐかな
- 三、 寒月懸れる針葉樹林 櫓の音凍りて物皆寒く
 野もせに乱る、清白の雪 沈黙の暁霏々として舞ふ
 あ、その朔風颯々として 荒る吹雪の逆まくを見よ
 あ、その蒼空梢連ねて 樹氷咲く 壮麗の地をこゝに見よ
- 四、 牧場の若草陽炎燃えて 森には桂の新緑萌し
 雲ゆく雲雀に延齡草の 真白の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の光 小河の濤をさまよひ行けば
美しからずや咲く水芭蕉 春の日の この北の国幸多し

- 五、 朝雲流れて金色に照り 平原果てなき東の際
連なる山脈玲瓏として 今しも輝く紫紺の雪に
自然の芸術を懐かしみつゝ 高鳴る血潮の迸りもて
貴とき野心の訓へ培ひ 栄え行く我等が寮を誇らずや

この歌詞から、「都ぞ弥生」には北海道の自然の雄大さが歌われていることが読み取れる。

『北大寮歌集』より、それぞれの寮歌の歌詞を見ていくと、「都ぞ弥生」が生まれた1912（明治45）年以降に、北海道の自然を歌った寮歌が数多くつくられていることが分かった。

このことから「都ぞ弥生」が北海道の自然を伝える先駆けとなった歌であったために、多くの人々が現在も大事に歌っているのではないかと考えた。

次に、北海道大学校歌「永遠の幸」の歌詞を見てみる。

永遠の幸 （札幌農学校校歌） 有島武郎作詞

- 一、 永遠の幸 朽ちざる誉 つねに我等がうへにあれ
よるひる育て あげくれ教へ 人となしし我庭に。

イザイザイザ うちつれて 進むは今ぞ
豊平の川 尽せぬながれ 友たれ永く友たれ。

- 二、 北斗をつかん たかき希望は 時代を照す光なり
深雪を凌ぐ 潔き節操は 国を守る力なり。

- 三、 山は裂くとも 海はあすとも 真理正義おつべしや
不朽を求め 意気相ゆるす 我等丈夫此にあり。

この歌詞から、「永遠の幸」は、友情や節操の大切さ、真理を求めることについて歌っていることがわかる。

どちらの歌も格調高く素晴らしいと思うが、一般的なことを歌っている「永遠の幸」と比べると、「都ぞ弥生」に心を惹かれる理由がわかる気がする。

道外には、北海道ほど自然が豊かな都市はあまりないように思われる。それゆえに、「都ぞ弥生」を耳にした道外の人々が、北海道に対する情景を思い浮かべ、憧れることは当然

のように考えられた。

現在の北大生が、校歌よりも寮歌に対して親しみを抱くのも、同じ理由であるのではないかと思う。

4. 最後に

最初にも述べたとおり、私にとって北大の歌と言えば、「永遠の幸」が真っ先に思い浮かび、逆に「都ぞ弥生」にはあまり親しみをもつことができなかったのですが、今回のレポート作成を通して、「都ぞ弥生」がどれだけ多くの人に支えられ、愛され、今日まで歌われ続けてきたのかを理解することができました。

レポート作成中に最も苦勞したのは、「永遠の幸」の資料探しです。残念なことに、北海道大学附属図書館の文献やインターネット上で検索してみても、校歌に関する資料を全く見つけることができませんでした。

私の所属しているサークルの先輩に、「永遠の幸」と「都ぞ弥生」について尋ねてみたところ、『都ぞ弥生』はわかるけれど、『永遠の幸』ってどんなものだったか?』と言われ、校歌に対してほとんど親しみが無いということが一層強く感じられました。

ここまで有名な寮歌もなければ、疎遠な校歌もないと思います。

いつか機会があれば、今度は「永遠の幸」について調べてみたい、また北大生にも校歌に親しみを抱いてほしいと考えています。

【参考文献】

- (1) 岩沢健蔵『北大歴史散歩』(北海道大学図書刊行会、2002年)
- (2) 北大恵迪寮『北大寮歌集』(北海道大学図書刊行会、1976年)
- (3) 田嶋謙三・塩谷雄・大高全洋『北大寮歌「都ぞ弥生」の作詞者 小作官横山芳介の足跡』(北海道大学図書刊行会、2003年)
- (4) 「都ぞ弥生」歌詞(山口哲夫『都ぞ弥生』東京エルム会寮歌委員会、1976年)。本稿106～107頁では、漢字の旧字を常用の新字に改めて歌詞を引用した。
- (5) 「永遠の幸」歌詞(『有島武郎全集』第1巻、筑摩書房、1980年、484～485頁)。本稿107頁では、漢字の旧字を常用の新字に改めて歌詞を引用した。
- (6) 「人の世の清き国ぞとあこがれぬ」(『北大百年史 部局史』1980年、1～63頁)

(くら ちはる／北海道大学工学部1年生)